

平成28年度 学校関係者評価(結果)

学校番号	126	学校法人静岡理工科大学 静岡北中学校	記載者	廣住雅人
------	-----	--------------------	-----	------

学校教育目標	将来のScienceとSocietyを牽引できる存在感と思慮深さを持った人材の育成	【総合評価】 自己評価にあるように、飛躍的な成果としてあげられるものはないものの、確実に生徒の成長や教育体制の整備がされている様子をうかがうことができる。特に、個々の生徒の成長に目を向けて教育をしていることは評価に値することであり、中学校三年間で人材育成をする学校運営が確実にされているものと考えられる。今後は、高等学校までの六年間における人間形成という観点を強く重視し、より一層社会的な評価を得られる学校となることに期待したい。		
教育方針	将来、科学技術に夢と希望をもち、創造性豊かな人材育成の基礎をつくる			
今年度の重点目標		評価	成果と課題	次年度の取組
1 目標生徒数を獲得する		3	学則定員を満たすことはできなかったが、受検者数で学則定員を満たし、厳正なる選考の結果56人の入学者を得た点は評価できると考える。	募集地域での小学校6年生の児童数が540人程度減少するという現実から、厳しい生徒募集になることは予想されるが、新たな広報活動をするなど、説明会等への参加者増を期待したい。
2 連携教育を推進する		3	内進生として高等学校に進学した生徒たちは、第2期生も誇れる進路結果を上げることができたと評価する。	内進生として、静岡北高等学校に進学していく生徒たちには、高等学校の核となり活躍することを期待したいので、より一層高等学校との連携を図っていくことを期待する。
3 グローバル教育を展開する		3	浜松日本語学院の学生との交流授業が毎年行われるようになり、加えて海外の姉妹校との授業での交流や、海外研修旅行を通して、異文化理解に努め、実践的な英語力の向上を図った。	海外の人たちとの交流の機会を、各学年で機会を多くすることで、実用的な英会話力をつけるとともに、異文化理解ができる資質を身に着けるための教育環境を整えること。
4 21世紀型スキルが身につく教育を展開する		3	年々コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力、論理的思考力が高い生徒たちが活躍している。情報発信力の強さを大学入試改革でもいかせるものと期待できる。	2020年からの大学入試改革において要求される能力を育成してきているので、加えて複合的な問題解決能力の育成をされることを期待したい。

領域	ねらい	評価項目	達成目標	昨年度の実績	成果と課題	次年度の取組	
学校経営	設定された教育目標にそい学校経営計画書が作成され、それに基づいた教育活動を展開する。	教育目標、学校経営計画書、教育活動	他校にはない本校における特異性を持った教育において、オリジナル性をさらに高めていく。また、SSZ活動においては、実践的な英語力を強めていくことを考えていく。	言語技術やCASEの授業において、本校独自のまとめあげたプログラムに関して、特にCASEについては、第2学年における数学領域での統計処理の分野で、さらなる発展性を持たせたオリジナルテキストを開発することができた。	4	CASEや言語技術さらにはSSZといった教育の展開で、いわゆる21世紀型スキルを高め、他校に勝る教育を展開することができた点は評価される。また、スカイセフやサイエンスフェアの場で、実践的な英語力をつけている点も評価される。	さらに一層、21世紀型スキルの育成をしていくことで、2020年の大学入試改革に対応しうる人材育成を継続的にすることを期待したい。
教育課程・学習指導	適切な教育課程が編成され、学習目標・計画が明示され、日常の学習活動を効果的に展開する。	教育課程、学習目標・計画・指導、課題実施、学習状況把握	会議体の組織構成を考えつつ、双方の調整を行えるメンバーによるディスカッションの場を確実に設けること。進路に関しては、静岡北高等学校の魅力や、在校生に深く浸透させていく手段を考える。	高校と情報の共有化を図れる会議体・組織体に改善はしてきているが、まだ十分な相互理解するまでには至っていない。中学の完成年度を迎え、物事のとらえ方に関する意識のギャップは、少しずつ解消されてはいるものの課題は残された。	3	前年度と比較して、高校との情報の共有化は、双方のメンバーによるディスカッションの場が増加したことできている。また、進路に関しても、静岡北高等学校の特色を、在校生に対して早期段階から伝え、よく意識啓発をしている。	今後も中高間の情報交換がしっかりと行えるようにし、6年間の教育の中で人を育てるための教育プログラムを検討してほしい。また、高等学校の核となる理数科・国際コミュニケーション科に進学する生徒数を増加させることを期待したい。
生徒指導	健全な中学校生活をおくれるような生徒への啓発活動を行い、個々の生徒へのサポート体制を家庭との協力のもと確立し、生徒理解に努める。また自立した生徒の育成のための支援をする。	生徒への啓発活動、家庭との連携、事前・事後指導体制、人間教育、生徒理解、基本的な生活習慣の確立、自立した生徒の諸活動	個々の生徒の成長段階にあった学習指導や生活指導を、家庭とも連携を取りながら学年部で計画し、それを中学校全体で共有することで、学校全体で生徒を育てるといった体制の中での人間教育を実践する。	運営委員会の前に実施される中学部会において、各学年部の取り組み、個々の生徒の情報共有に関しては行うことができた。そして、運営委員会においては、中学が考える施策として、高校の先生方も交えて議論を行うことができた。	3	定例の会議に縛られることなく、適宜会議を開き、速やかに問題や課題解決に対応している。また、個々の生徒に応じた学習指導や生活指導を、家庭との連携の中で展開している点は評価される。	引き続き、個々の生徒に応じた学習指導・生徒指導をしていくことを期待したい。そのためにも、定例的な会議にとどまることなく、フレキシブルな情報交換の場を設け、教職員全体で個々の生徒理解に努めてほしい。

進路指導	学校の方針に基づいた進路指導を展開し、個々の生徒の進路希望に即した緻密な指導を実行する。また、本校独自のキャリア教育を実施する。	学校の方針に基づく進路指導、生徒への情報提供、個々の生徒への対応	個々の生徒に対して、早期段階から将来の職業観を意識させるキャリア教育を充実させる。また、静岡北高等学校進学の際に、生徒の適性を十分に考慮したうえで、高校入学後の学習体制が見極められるような進路指導をしていく。	高校との情報共有化に関しては、中学側と高校側でのギャップの解消については改善された。中学校の実態に即した進路指導体制をどう進めていくのか、中学から進学する生徒を6年まで育てるかを、さらに踏み込んで検討し、本校が求める生徒像を明確にした。	4	自己評価にあるように、早期段階からキャリア教育を充実させることは、各学年できていると評価できる。また、高等学校進学の際に、生徒の適性を考慮した進路指導を行うことができたことと判断できる。	次年度に向けては、理数科や国際コミュニケーション科に進学する生徒を増加させ、静岡北高等学校で中心的な活躍をする生徒を一人でも多く育てるよう努力されることを期待したい。
安全管理	日常から防災に対する意識を高め、予期せぬ災害時に適切な対応ができる体制作りをすることが必要。また、学校としても校内の危険個所の定期的な点検、スクールバスの安全運行といった意識を常に持ち合わせる。	防災訓練(校内・校外)、災害時の対応、安全な教育環境、安全なスクールバスの運行	中学だけでなく、高等学校とも方針をすり合わせ、有事の際への連絡方法などに関して、システム構築を再検討する。	学校独自の一斉配信のシステム及び法人が作成した安否情報確認システムに関する機能性の改善については、あまり見ることができなかった。本校独自の一斉配信システムについても、機能はさせたものの、その使用は一部にとどまった。	3	数年前に中学独自の連絡体制を整えていたが、今年度は高等学校と方針を合わせて、新たな連絡方法などに関してのシステム構築を再検討することはしたものの、確立させるまでには至らなかった。	次年度から学校法人全体で新たな安否情報確認システムを導入するとの情報があるので、このシステムもうまく活用して、安否情報以外の通常の連絡体制を整えることで、生徒・保護者との連絡手段を新たに構築してくれることを期待したい。
保健管理	生徒の健康管理のための検診計画を作成・実行し、疾病者に対する治療勧告を確実に行う。また部活動の活性化を図る。	検診計画、健康管理指導、運動部・文化部の活性化	生徒の健康管理に関する情報・対応についての教職員間での情報共有体制を維持する。また、突発的なことに関する報告体制をしっかりとさせる。部活動に関しては、生徒たちが部活動に集中して取り組めるようなバックアップをする。	生徒の健康等の留意点に関しては、全教職員で共通理解をするよう情報の共有化に極力務めた。また、部活動に関しては、全国大会に出場したり、市内ではあるが強化指定選手に選抜される生徒も出てきた。	3	生徒の健康管理に関する情報や対応についての情報共有化や有事の際の報告体制はできていると判断する。また、部活動に関しては、行事との関連を考えながら、生徒の活動時間を確保したと考える。	個々の生徒の健康管理に関する情報に関しては、引き続き共有化し、教職員がいつ突発的なことが起こっても、適切に対応できる体制を維持してほしい。また、部活動顧問との連携をうまくとりながら、生徒の活躍の場を確保してほしい。
特別支援教育	「知・徳・体」のバランスのとれた人間として成長させる教育プログラムを展開する。	CASE、言語技術教育、SSZといった本校独自の教育プログラムの推進と、心身の成長に即したキャリアデザイン教育プログラムの展開による支援	校内ネットワーク環境の整備に伴い、本校独自の教育とICT教育の運動について研究する。また、成長期で様々な悩みを抱える生徒に対しては、教員やスクールカウンセラーのサポートにより、個々の生徒に適したキャリア教育をする。	CASE、言語技術、SSZの活動により、生徒の論理的思考力や情報発信力は、かなり高まった。また、個々の生徒の状況に応じた学習面・生活面の指導により、どの生徒も年度当初より成長を伺うことができた。	3	校内ネットワーク環境の整備に伴い、十分とは言えないものの、新たなICT教育の研究をはじめた。また、悩みを抱える生徒・保護者に対する教職員・スクールカウンセラーのサポート体制はできていた。	新たに、校内ネットワークを利用したICT教育の実践を、各教科指導の中で実践するとともに、情報を共有化し、生徒にとって効果的かつ魅力的な教育体制を提案してほしい。
組織運営	組織的な校務分掌体制を整え、規律をもって教職員が勤務を全うする。また計画的な予算編成を中長期的な観点から考え、日常の経理業務を正しく管理する。加えて個人情報に関する管理、公文書管理を適切に行なう。さらに保護者・地域と連携した活動を展開する。	効果的な学校運営体制の確立、組織的な校務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、中長期計画の編成及び遂行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立と効果的な活用	高校と連携し、今後の中期的な視野の中で、学校変革をどのように推し進めていくビジョンの持ち方を検討する。	会議体は必要なものだけに精査し、どの会議がどういった性格のものであるかを教職員が共通理解し、それぞれの会議に全員で臨むことができた。	3	高等学校との連携の中で、中期的な学校変革のビジョンについての検討がなされ、平成29年度からの第三次中期計画が策定された。	平成29年度からの第三次中期計画を計画を実行し、新たな学校づくり邁進すると共に、高い意識を持った教職員集団を形成し、社会的な評価がより一層高まることを期待したい。
研修	学校の教育内容が問われる時代、教職員の資質向上が常に求められるので、計画的かつ時代が求める教師となっていくための研修を的確に実施し、各教職員が個々のスキルを上げていく体制作りをする。また、研修内容を共有化していくためのシステム作りをしていく。	計画的な研修体制の確立、校外研修への参加、研修報告会の実施	中学校設置の際の原点に戻り、改めて本校におけるICT教育の在り方がどうあるべきかを、実践を行いつつ検討する。また、Wi-Fi対応の校内ネットワーク環境が整っていく中で、どのような教育手法が効果的なのかを考えていく。	入試広報における学校見学・説明会などにおいて学習成果に対する外部からの高い評価を得ることはできて、外部研修への参加についても、極力時間と人的な問題をクリアしながら進めたが、人的な制約から著しく参加数を伸ばすまでには至らなかった。	3	ICT教育の展開は、中学校設置時の一つの目玉であったことを考え、ある意味原点回帰をする中で各教科での展開ができたことと評価される。今年度から整備されたWi-Fiの校内ネットワーク環境を利用したものは、まだ成長段階であるが今後期待したい。	第三次中期計画の実行段階に入中で、改めて育てたい人間像をする中で各教科での展開を検討する中で、学校の方向性を明確にし、教職員全体が一丸となって学校づくりに取り組んでいくことを期待する。
保護者、地域住民との連携	学校を支えてくれる保護者の会や外部団体との連携を強化し、学校運営を側面から支援してくれる組織の意見を受け入れながら、更なる本校の発展を目指す。	保護者の会との情報交換、学校運営に対する外部団体の参画、外部要望の学校運営に対する反映、保護者に対する協力依頼	得意技能を持った方を講師として招き、キャリア教育の側面から、生徒を育てていくことを試みる。	県・市とコラボレーションした環境保全に関するボランティア及び研究活動には積極的に参加することで、地域との関係を密接にし、社会的な評価を高めた。しかし、小学生との交流については、内部での広報活動にとどまった。	3	外部講師を招いてのキャリア教育や心身の教育は、保護者の間でも日常の子育てのヒントになるものであったと好評であった。	教員だけでなく、これからは生徒・保護者にとっても効果的なプログラムを実行することで、学校全体として意識を共有できるようにしていくことを求めたい。
施設設備	施設設備の美化と定期的な点検を確実に実行し安全管理に努め、生徒たちにしっかりと学習環境を整備する。	効果的な施設利用と環境美化、施設・設備の点検、学習環境の整備、図書館の活用	高校と一緒に、Wi-Fi対応の校内ネットワーク環境が整備されるので、これを生かした教育活動の展開に関して検討する。	本校がスタートした時点で持っていたICT教育のさらなる発展形態を考えることについては、積極的に実践を行った。各教室の環境整備に関しても、有線ではあるが、教室内でネットワークが利用できる環境は整備できた。	3	高等学校と一緒に、Wi-Fi対応の校内ネットワーク環境が整備されたが、タブレット端末の台数が少なく、教職員が活用する方法を十分に検討することができなかったことは、やや課題が残った。	中学校は、組織的にも小さいので、教職員の活動もまとめやすい環境にあると思われるので、タブレット活用において、より早く具体的な実践を展開した授業展開をしてほしい。
				総合評価	3		